

研究テーマ

「授業における効果的な新聞の活用について」

神戸市立鈴蘭台中学校 教諭 米谷 浩実

1、学校の概要

神戸市立鈴蘭台中学校（こうべしりつすずらんだいちゅうがっこう）は、神戸市北区北五葉にある公立中学校。

鈴蘭台の住宅地造成による人口・生徒数増加により、1969年4月1日神戸市立山田中学校から分離し、開校した。通称は「鈴中」。

2、学校・生徒の様子

平成24年度在籍生徒数は、1年5学級169名、2年6学級208名、3年5学級178名、特別支援学級1学級3名の合計556名である。明るく素直で、自己表現の豊かな生徒が多く、毎日の授業や特別活動などに意欲的・積極的に取り組んでいる。



3、研究目標および研究計画

NIE実践3年目の本校では、第3学年の社会科の授業を中心に活動を行った。

本校3学年社会科では、今回の学習指導要領の改訂で言語活動の充実と関連して重視されている「適切に表現する能力」を育成するための学習指導の充実を目指しているところだが、表現する能力を育成するために「自分

の意見・感想を書く」という活動を可能な限り取り入れてきた。以下、研究計画の概略を示す。

(1) テーマ

「授業における効果的な新聞活用」

(2) 目標

- ①多くの生徒が新聞に触れる機会を設けることによって、新聞の楽しさや面白さに気付かせる。
- ②授業で新聞記事を資料として活用することによって、教科書の内容をより実社会とのつながりの中で理解させる。
生きて働く知識の習得に努めさせる。
- ③保護者にもNIE活動への理解を深める。

(3) 対象生徒

第3学年178名

(4) 計画内容

①新聞配達予定表

新聞名	購読月
朝日	5・6・9・10月
毎日	11・12・1・2月
読売	5・6・9・10月
日経	11・12・1・2月
産経	5・6・9・10月
神戸	11・12・1・2月

②新聞コーナーの設置

南校舎4階3年生教室廊下前



③授業の実践

期間：4月～翌年3月までの1年間

教科：社会科・総合的な学習の時間

内容：修学旅行新聞・歴史新聞の作成やひょうご新聞感想文コンクールへの応募他

4、本校での取り組み

(1) 社会科での実践例

《歴史新聞づくり》

春季休業中の宿題として、太平洋戦争の沖縄戦に関する新聞づくりを課題とした。

《ひょうご新聞感想文コンクールへの応募》

夏季休業中の宿題として、神戸新聞社主催の「ひょうご新聞感想文コンクール」に3年生177名が応募した。

《「政治」の大切さを感じたい(隊)》

- ①各生徒が最も関心のある政治の重要性を感じる新聞記事を選ぶ。
- ②記事や出来事の内容をまとめる。(誰が・いつ・どこで・何を・どうした等)
- ③内容のキーワードを記入。
- ④読者に伝えたい内容をまとめる。
- ⑤感想を記入。
- ⑥記事に関する意見交換を行う。

《「地元地域」を紹介したい(隊)》

- ①自分が人に紹介したい地元地域の記事を選ぶ。
- ②記事の見出しを書き出す。
- ③紹介してみたいと考えた理由を記入。
- ④その地域の広報部長になったつもりでPR記事を考える。
- ⑤ワークシートが完成したら、クラス内で発表。
- ⑥発表後、最もよかったPR記事について投票し、クラス内で最優秀賞を決定する。

《「福祉」について調査したい(隊)》

- ①自分が福祉について分かりやすいと感じた資料の添付している新聞記事を選ぶ。
- ②記事や出来事の内容をまとめる。(誰が・いつ・どこで・何を・どうした等)
- ③資料があることによって、どのような点が分かりやすくなったのかを記入。
- ④資料の工夫されている点を記入。

《「沖縄(修学旅行先)」について調べたい(隊)》

- ①研究テーマ沖縄を話題にした新聞記事を選ぶ。
- ②記事を選んだ理由を記入。
- ③説明ができるように辞書等を活用し調べる。
- ④記事に関するインタビューを生徒相互に行う。
- ⑤自分の意見をまとめ、感想を記入。

(2) 総合的な学習の時間での実践例

《修学旅行新聞づくり》

5月25日～27日に行った修学旅行での取り組みを事後学習として、テーマを「平和」に設定し、新聞という形式で実践。



(3) 文化祭での展示・発表

例年10月下旬に行われる文化祭において、提出者全員の「修学旅行新聞」を展示し、来校された方にも見ていただくことができた。

(4) 生徒の感想

- ①3年間、社会科の授業を通して、新聞のワークシートに取り組んで、新聞を読む習慣が付き、日本の状況や他の国のことも関心を持つことができた。中学校に入学した頃は、スポーツ欄のサッカーの記事しか読まず、政治面や経済面の記事は見ずにとぼしていたが、読んでみると意外に興味深いこともたくさん載っていたので、中学卒業後もできるだけ新聞を読むようにして、たくさんの知識を得たい。
- ②昔から、新聞は字が細かくて、文字数も多く、読む気になれなかった。しかし、社会科の授業で新聞記事を取り扱うので、以前よりは、新聞を読む機会が増えた。新聞は今の世の中のことがよくわかるものなので、時間がなくとも大きな見出しは読むように心がけたい。

- ③1年生の頃は、スポーツ欄と番組欄しか見なかったけど、今は他の記事も見erようになった。
- ④1～2年生の時は、気が向いたときにしか新聞を読まなかった。しかし、3年生になって、公民の勉強をするようになり、政治欄や経済欄のニュースにも関心が向くようになった。暗い記事の多さが、新聞を読まない理由だったので、新聞社の方には、明るい記事も多く載せてもらいたい。
- ⑤社会科の授業の資料として、新聞記事がよく使われたので、授業で学んだことと実際の社会との関連がよくわかった。



5、成果と課題

(1) 成果

- ①3年間の活動を通して、生徒の新聞に対する親しみが増し、多くの場面で新聞に触れる機会が多くなった。
- ②自分が興味を持った記事について、自分の感想や考えをまとめ、発表しあうことを通して、一人一人の表現力やコミュニケーション能力を高めることができた。
- ③各生徒の取り上げた記事の内容を伝えると、新聞の中の小さな記事にまで目を通すようになり、新聞を作る人々の読み手に対する真意などについても考えることができるようになってきた。

④新聞は授業で使えるように作られたものではないが、授業者がアイデアを考えたり、工夫したりすることで、多くの場面で活用できることが明確になった。



(2) 課題

①新聞を授業で扱う機会について、もっとアイデアを出し、工夫していきたい。そうすることによって、学年に関係なく、中学生にとって新聞を活用する幅も広がっていくと考えている。そのためには、常時、情報交換できるような場面や機会をさらに設けていただけたらと思う。

②活動の中で記事を集めたのは一般紙が中心で、どうしても中学生には読み方が難しい漢字や内容が理解しづらい文章に出会ってしまう。辞書を引く良い機会にもなったが、やはり、その場で教師に尋ねてしまう生徒も多かった。

(3) 考察・感想

①商標権の問題を取り上げた際に、北海道の老舗ブランド菓子名と大阪の芸能会社が売り出した菓子名の訴訟について討論した。単なる是非論ではなく、その理由を考えて、伝える活動を重視して行った。「大阪の業者が洒落で作った商品が売れたので、訴訟になったのではないか」「北海道の業者は、本物の価値が下がることを問題にしたのではないか」など、本質を突いた意見も数多

く生徒から出た。

②今年度は公民的分野の学習を通じて、国会や内閣についても学んだ結果、前与党の関連施策に興味を持つ生徒がいた。特に、自分たちの生活に直接関係する「消費税増税」「児童手当（旧子ども手当）」や「高等学校の授業料無償化」等に関心を寄せる生徒も多かった。

③変化する社会の動きを素早く報道し、その背景や問題点などを解説して伝えてくれる点で、新聞は格好の教材・資料といえる。



6、おわりに

「N I E 活動実践校」3年目となった平成24年度は、過去2年間の実践を生かしながら、活動を行うこととした。今年度は新聞記事から得た情報を、自らの意見として他者へ伝える活動の実践を通して、生徒の新聞への興味・関心を高めることが出来たと思われる。21世紀は、ますます、価値観が多様化し、複雑な社会となることが予想される。その中を生きることになる生徒にとって自分の意思を相手に伝える力は極めて重要な力である。今年度で「N I E 推進校」としての実践を終えるが、今後は、これまで3年間実践してきたことを、どのような形で平素の学校教育活動の中で活かしていくかが課題である。最後に、平成22年度より3年間、素晴らしい実践機会を与えてくださった兵庫県N I E 推進協議会の方々にお礼を申し上げたい。